

劉以鬯と也斯

——香港文学の継承・発展をめぐって

Liu Yichang and Ye Si

—On the succession and progress in Hong Kong Literature

池上 貞子

Sadako IKEGAMI

提 要

在台灣、提到50年代60年代文學的時候、有「縱的繼承」和「橫的移植」的說法。就此、香港的劉以鬯既體現了「縱的繼承」、又不啻為「橫的移植」、他的存在為新一代文學青年樹立了榜樣、成為文學青年們景仰的長者。

這裡提及的新一代文學青年、其中亦有也斯。比較劉以鬯與也斯、前者身為小說家其作品卻充滿詩意；而也斯身為詩人其作品卻一欲跳離常識意義上的詩。也斯敏銳地觀察著劉以鬯的文學世界、著眼於其作為詩性的小說家的獨特存在、他發現了劉以鬯屬於另類詩人、而也斯也因此而成為解讀其詩性的另類讀者。也斯一邊從劉以鬯那裡吸收現代主義養分、一邊結合60年代的「實事求是」精神、將香港作為「鄉土」、筆下傾注著感情。

已經步入中年的也斯、在個人的身份上是如此、於文學家身份上亦然：他似乎擁有某種長者的責任感、欲依靠「重劃(的)地圖」而跨越「邊界」。

はじめに

大陸以外の中国語文学のなかで、たとえば台湾文学においては特に50年代、60年代によく「縦の継承」と「横の移植」という言葉^(注1)が言われたが、政治的な理由により、これらには様々な困難が伴った。たとえば、白先勇なども五四期の文学や小津安二郎などの日本映画に触れたのは、アメリカ留学以後だと述べている^(注2)。これに比して、香港では中国大陸の文学作品も日本映画も一貫して触れることができていたうえに、劉以鬯(りゅういちよう、Liu Yichang、1918-)のようにこれらを具現する文学の先達が存在があった。このことは次世代にとっては非常に意味のあることである。本論では、劉以鬯と次世代代表の、詩人であり小説家でもある也斯(やし、Ye Si。本名、梁秉鈞。1949-)の人となりおよび文学営為について比較考察し、香港文学の継承・発展の状況とその意義について考える。

なお、本論は、昨年2009年11月に、香港公開大学で開催された劉以鬯シンポジウムにおいて、中国語で発表した小論をもとに、在席の識者らから寄せられた批評や提言、および日本での日本語による発表であることなどを勘案して書き直したものである。

I 劉以鬯と也斯

香港文学が今日あることについては、劉以鬯の存在を抜きにしては語れない。彼は上海で生まれ育ち、ミッション系のセント・ジョーンズ大学で学んだモダンボーイである。抗日戦争の間、臨時政府のあった重慶で雑誌の編集にあたり、戦後、上海に戻って雑誌社を立ち上げるが、内戦になり、1948年に香港に移った。その後、1952年から数年間、シンガポールやクアラルンプールで新聞の編集に当たったが、1957年に香港に戻ってからは、様々な新聞の副刊（文芸欄）の編集や欧米文学の翻訳を行うとともに、自らも「酒徒（のんだくれ）」「対倒」などをはじめとするたくさんの作品によって香港を代表する作家となり、90余歳の今日に至っている。1996年からは雑誌『香港文学』を刊行し、香港文学の定着と発展に寄与した。長年、雑誌の編集に関わりつつ培った文学創作者としての作風は、内容的にも形式的にも現代の都市文学の特徴をそなえており、「都市の吟遊詩人」という呼び方をする研究者さえいる^(注3)。

ところで言語表現に重点をおいて考証した在日華人研究者の林少陽は、劉以鬯の作品が香港の若い世代の作家に大きな影響を与えた例として也斯をあげている。そして詩人でもある劉の「詩的な文体」をその特徴としてあげ、それが遠くは30年代上海の、そしてさらには東京の「新感覚派」につらなるものであると述べている^(注4)。林はかつて「酒徒」を論じる中でその例証を行ない、劉が様々な機会に「詩と小説の結合^(注5)」を提唱したり、「小説家は“小説における詩と象徴の潜在的特質”を重視すべきである^(注6)」といった発言をしていることや、自身の「酒徒」の解説からこう結論づけた。「『酒徒』の書記体上は、ジャンルについていう際、疑いもなく詩と小説が結合したものと見える。そうであるが所以に散文詩でもある。このテキストは少なくとも詩というテキストの様式を小説に織り込んだものであり（或いはその逆）、詩と小説、叙情と叙事との間を往復するものであるといえる^(注7)」。そして、ある具体例に沿ってそこに見られる詩的特徴を大きく3点（比喩、イマージュ性、音声）挙げ、以下のように結論づけている。

このテキストはこのように読者の読書意識の参入により、まさに詩と小説・叙情と叙事の間を往復する運動の装置になっているのである。ひとまず「小説」という名目で出現し、重層的言葉の往復関係に読書する人の意識がおかれることを想定して、尚諸ジャンル間の往復関係まで導入することは、まさに『酒徒』という、「主人公」の言葉と語り手の言葉、「詩」と「小説」などの境界線を崩す作業そのものである。^(注8)

林少陽はまた、劉が（そして也斯が）文字の独立性とイメージ性を重要視していることは、劉が也斯の言葉を引用して、「小説の内容は一番重要な点ではない。文字こそ重要である。小説は現実を反映するのではなく、それ自身が現実であるからだ」と述べている^(注9) ことにも根拠をおく。

いったいに劉以鬯の小説を読むと、一つ一つの文体には耳に心地よいリズムがあり、伝統的な意味でも詩的ある。また彼のいくつかの小説には視覚的にも詩の技巧が用いられている。例えば「春雨」では現実描写の部分を明朝体、思念の部分を（ ）に入れてゴシック体にして同時進行させている。また「蜘蛛精」では独白部分をゴシック体にして、地の文に入れ込ませている。また「盤古與黒」の場合は<心穏やか>で<乱れていない>感覚を表現する時は「黒」という文字を左右上下にきっちりと並べ、「心が乱れていること」を表す時は大小様々の「黒」の文字をアランダムに配置するなどのように、普段は詩の手法として考えられている視覚的な手法を小説の中に持ち込んでいる。

ところで、也斯自身の語るところによれば、ある時、北京から来た小説家の劉索拉が香港大学で「文学と音楽」と題して講演を行なった。彼女はピアノの弾き語りで、彼女の小説と音楽について語った。彼女の話はとても感動的で、聴衆は大喜びだった。その時の出席者の一人が発言の際に冗談でこう言った。「也斯の詩は別の極にあると言うべきだね。完全に視覚を主にしてている。彼の詩は非音楽的あるいは<脱>音楽的というべきだ。」そこで也斯は詩の会で弁明し、こう述べた。「別に音楽に反対なわけではありません。ただある種の、われわれが何も感じなくなっているような装飾的な音楽が嫌なだけです」^(注10)

彼がここで音楽性を警戒している背景には、ある特別な目的や意図をもって詩が朗読された場合、思想や感情が容易に「作爲的」なものにされてしまし得るということで、さらなる検討がなされるべき課題であるが、今回は深い入りしない。この也斯の反論や自然の音を好むという言葉は、過去の彼の行動と創作にはっきりと足跡が残されている。70年代の彼は香港の離島やへき地を歩き回り、それを題材とした初期の散文や詩は、自然の色や音に満ちている。身辺雑記の観察から始まり、香港の離島（外島）、日本、台湾、中国大陸での見聞をつづった散文集『都市筆記』（台湾・東大図書公司印行、1987）はまさにその結実で、そのスタンスはその後のアメリカ、ヨーロッパその他の諸外国へと広がっていく。この自然への憧憬やその描写は劉以鬯にはあまり見られないもので、育った環境、時代、個人的な資質の要素が複雑に絡み合っているのだろう。也斯にとって、香港は「本土」「郷土」であり、通常「郷土」いわゆる「故郷」とは自然の景観と分かちがたく結び付いているものである。

そしてもうひとつモダニズム（むしろポスト・モダニズムと言うべきか？）詩人としての資質があると思う。台湾の歴史ある詩雑誌『笠』の在米詩人杜国清は、モダニズム詩学の影響が、詩芸術に新しい視点を生み出したと述べる。「それはロマン主義的<诗情>から知性的<詩想>へ、

＜韻文＞的格律から＜散文＞的リズムへ、耳の＜音楽性＞から目の＜絵画性＞へ、主観情緒の＜説明＞から間接指示の＜象＞へ、個人経験の＜主観叙述＞から詩の戯劇性の＜客観呈現＞或いは即物性の＜思考観察＞への移行といったことです。」^(注11) 也斯の文学が劉以鬯に触発されたモダニズム文学であることは、先の林少陽の解説からもうかがえるであろう。

また、創作の動機として、劉以鬯も也斯も社会的な事件に即応して作品化することがある。たとえば劉以鬯はあるバス停で起こった交通事故に感じて「打錯了！（かけまちがいです！）」という小小説を書き、也斯は新界のどこかの村でワニがつかまり大騒ぎになった現象をとらえて「捉鱷魚（ワニを捉える）」という詩を書いた。前者は2つの逸話から成り立つ。2話ともデートの約束に遅れ気味な男が、電話のベルが鳴ったのを相手の催促の電話だろうと思いながら、身支度をして出かけて行く話だが、1つ目の逸話では受話器を取ることなくアパートを飛び出したところで、近くのバス停にいた老女および少女とともに、トラックにひかれて死ぬ。2つ目は、出がけに再び鳴りだした電話の受話器をとるが、これが間違い電話だった。タイトルのように「かけまちがいです！」と叫んでアパートを出たところ、近くのバス停に小型トラックが突っ込み、老女と少女がひかれて死んでいるのを目にするという話だ。

この小小説はリズム感のある文体で、痛ましいとかかわいそうとかというような、むやみな感傷をもたず、客観的な物語になっている。後者はやや散文的に事の次第、すなわち新界と呼ばれる場所でワニがいるのが見つかり、捕獲のためにいろいろな手段が講じられたり、それを見に来る人々を当て込んだ商売ができたりして、人々が右往左往する姿を叙述している。皮肉っぽくはあるが、作者は大騒ぎをする人々にどこか自分との地繋がりを感じて、怒りと言うよりは「やれやれ困ったものだ」と苦笑している。いずれにせよ、社会現象に反応して書いたという創作姿勢は同じで、小説、詩という形式は異なりつつも、反対の形式でも成り立つものであり、先に述べた2人の文学の特徴から来る詩と小説の越境が行われている。

Ⅱ 也斯の小説「境界」と詩「地図を書きかえる」

ところで劉以鬯との類似点はそれとして、次世代代表の也斯を也斯たらしめているものは何だろうか。その一つは先に言及した彼の香港アイデンティティ、「郷土性」あるいはそこからくる「郷土回帰」精神とでも言うべきものであるということができるかもしれない。ただしこれは永久不変、直線的なものではなく、途中で「揺れ」や「ブレ」があったことも含めるもので、それはまた世代と深いかかわりをもつ。1949年生まれの彼は、生後間もなく両親に連れられて香港に来た。彼が物心ついた時から、香港で育ち、香港の風土を「郷土」として成長したこと、そして1960年代後半に多感な学生時代を送ったことの意味は大きいと思う。

1966年、中国大陸のプロレタリア文化大革命の発動に始まり、香港では1967年の大暴動、中

文公用化運動があり、他にもアメリカのベトナム戦争反対、フランスのカルチェ・ラタン、そして日本でも 1968 年あたりから全共闘と呼ばれる学生運動があった。也斯がこうした状況のなかでどう行動したのか、本人に確認したことはないが、こうした雰囲気から超越していたとは思えないし、なによりまず詩「我的六〇年代」（1994 年作）が彼の立つ位置を示している。以下はその後半部分である。改行は / で示した。原文の各行は 1 字目から始まるもの、途中から始まるもの様々で、動乱の時代を表していると思われるが、引用では配慮せず、一律にした。

…前半略

僕たちの腕白坊主のような足取りは / 無意識のうちに境界線を越えた / 頭上には常に厳格なきまりがあった / 「兵隊さんを点呼して / 誰がうらざり者か当ててみよう！」 / そのうえ読んで本のため / 長髪にしているために（うらざり者だ！） / 人から嘲笑された / 他人とのゲームのなかで / いかに自分の位置を見つけるか？ / 古臭い詩文をひもときながら / 同時に外国の奇怪な地下雑誌を定期購読している / 僕は花の言辞にあこがれた / 僕は灰色の粗末なラップズボンを履いた / （「僕は見た僕らの世代の / 最高の精神が…」 / 減びた） / 僕は地下文学を翻訳した / 僕はまじめな代用教員になろうとした / いつもいつも睡眠不足 / いったい昼と夜の間をどうやって行き来したものやら / あるものを運んで夜明けの町はずれを通り抜けた / 僕は他人を / 僕自身に翻訳した / 唐代の詩人カリフォルニアの詩人を通じ / 僕の感覚を伝える手段を見つけようとした / 片足跳びで橋を渡るような感覚を / 僕は現実のサンドイッチを食べる / 自分はいったい何者なのか / 歯の隙間にはさまって / 取りきれないもの / 石蹴り / まりつき / A ラインのスカート / 香港フラワー / Donna Donna / 中国の大地 / 関羽の寺でルーツ探し / 愛と平和 / 男女同権 / 中華を守れ / どっしり重い門扉 / 疲れ果て超越逃避を求めた / クールでホットなジャズ・バー / 集団的で個人的、抑圧的で放縱、困惑気味で充実 / 自分を見つけられたようでもあり / 失ったようでもある / 街頭をさまよい / ここはどういう場所なのか / どうしたら自分は抜け出せるのかと考える ^(注12)

ここには「長髪」、「A ラインのスカート」、「Donna Donna」、「愛と平和」、「男女同権」といった当時の全世界の資本主義社会の若者に共通なキーワードと、「ホンコンフラワー」、「中国の大地」、「関羽の寺でルーツ探し」、「中華を守れ」などの華人社会の「郷土回帰」精神が混じり合っていて織り込まれている。日本では後者の要素はあまりなく、学生運動の非日常性が過ぎさった後、諸外国を放浪する者も多かった。これは日本の経済発展と 60 年代初頭に出版された小田実の著書『何でも見てやろう』^(注13) に由来するその言葉が背景にあろう。也斯が 1970 年代に香港の各地、日本、台湾、大陸など多くの地を歩き回ったのは、その意味で当時の若者に共通の行動であるようにも思える。この文字通りの「实事求是」精神（中国の政治プロパガンダのそれとは違う

意味)は、その後の彼の生き方に一貫しており、今日の東奔西走スタイルの原型がそこにあるとも言える。

こうした体験の中で、彼が感得したものは何だったのだろうか。それは香港の位置、すなわち香港は中国の「境界(原語:邊界)」であるが、東西の交差する場としていつでも境界線を越えられるところにいるという実感だったのではないだろうか。それは言葉を換えて言えば、ある種の事柄は「角度」を変えれば価値が転倒したり、あまり意味をもたなくなる、あるいは別の価値や意味合いをもつものだということだ。彼の小説「境界」(1993年作)はまさにそのことを生真面目に訴えている。ところどころに先に述べた青春時代の片鱗が垣間見え、時にはそのときから習い性となって、常に「境界」に立ちがちな自分、何だか割りを食うことが運命付けられているような自分に対し、自嘲とあきらめと、そして自負さえ感じられる。彼は「境界」のなかで、まずワシントンの地図の上から自分の行きたい劇場を探し始め、結局はワシントンの地図の外にそれを尋ねあてた。真夜中の1時2時に道に迷い、思わずこう感慨にふけるのである。

……わたしも思わずこう考えた。つまり自分は自ら進んで面倒を探しているのではないか。しばしばより多くのものを見ようとして、なぜかわからない追求のために、たいていいつも地図の外まで、自分の熟知している範囲の外まで行ってしまい、理由もなく安全ならざる場所に身をおくことになってしまうのだ。(注14)

ところでこの作品は也斯の他の小説と同じくいくつかの逸話が錯綜しているのだが、彼の他の作品とは異質のところがある。この小説のなかで、複数の二人称「あなた(君・おまえ)」に向かって語りかけられているが、途中で主たるストーリーの「あなた」が自分の息子の以文であることだ。つまりこの小説は也斯の息子に「贈る言葉」なのであり、珍しく也斯が父親をしているのである。

余談ではあるが、小説の中では他に友人に語りかけている「你」(中国語の第二人称)もあり、代名詞である程度対話者の関係が予測できる閱讀システムに慣れている日本語を母語とする者などは、代名詞のまま宙づり状態で引っぱられると、少々混乱し、途中で何度も前に戻って確認せざるを得なくなったりする。日本語では「我」と「你」には唯一無二に対応する訳語はなく、代名詞でもある程度両者の関係がわかるような仕掛けになっているからだ。ひとりの中年の男性が、成人した息子に対等にある程度距離を置いて放そうとすれば、友人に対する時と同じ呼称や言い回しがあり得るが、いかにも父親らしくしようとすればまた別の表現になる。一般的なケースとして、自分のことは「わたし」(一般的。知性や風格のある父親を連想)、「僕」(少し青くさい。息子と同等になろうとしているような印象)、「おれ」(くだけた感じ。口語であるが、ある種の雰囲気を出すため、レトリック的に文章で使う人もいる)などが考えられるし、息子に対して

は「おまえ」（父親が優位に立とうとしている）や「君」（同等になろうとしている）が考えられる。①「わたし」が「おまえ」に語るのだとしたら、親として説得、説教をしている感じがある。②「わたし」が「君」に語るのだとしたら、親の立場にはいるが、大人として息子と同等になろうとしている。③「僕」が「君」に語るのだとしたら、自分にも人間として悩みがあるのだよと、同等になろうとしているような印象を与える。筆者は最初①のケースで考えたが、あまりにも父親父親した也斯は、彼の文学の作風からして似つかわしくないの、②か③になるのだらうと思う。末梢的なことにも思えるが、そのことにより文体も変わるので、中国語から日本語に翻訳する際には、翻訳者の姿勢をしめすキーワードになりうるものである。

ところで、也斯はこの小説でしばしば教訓めいたことを述べている。それは実際の場面に応じた現実的な話題なのであるが、いつの間にか普遍的な原理や真理に変わっている。まるで食べ物や日常生活の断片という「俗」から入り込んで、いつの間にか形而上学的な「雅」のレベルに達している彼の詩そのものようだ。^(注15)

どこが56番街でどこが58番街なのだろう？ 本当に申し訳ない。標識がないと、往々にしてこの辺の通りを通るとき、てっきり前だと思っていた場所が実は後ろだったりして、またもや引き返さなければいけなくなるんだ。1回道に迷っただけで、もう君に笑われてしまった（言うておくが、僕はけっして知り合いの中で一番お馬鹿だというわけではない）。僕が君に話せるのは、道に迷うことの教育的意義だけだ。それは、現実と僕たちが思い描く青図とは必ずしも一致するものではないということ。今日の教訓は、僕でももちろん道に迷うことがあるということだ。^(注16)

今僕は君がある段階にきていることがわかった。君は同世代の若者たちが熱をあげているものだけでは足りなくて、さらによくこの世界を知りたいと思い、境界線の外に出て、自分の視界を広げたい、ああした軽薄な感情とバランスが取れるようなものを探し出したいと考えているのだ。^(注17)

ここにみられる父と子の関係は、もしかしたら冒頭に述べたような劉以鬯と也斯の関係を彷彿とさせないだろうか。ただし、60年代に息子だった人は、自ら手さぐりで父親（文学上の先達）を探したが、現代では父親から息子に発信するのである。この3、40年の間にかつての仲間たちの境遇がそれぞれに変わりつつあることが、息子以外の、友人の「あなた」に対する語りかけの言葉によって知れ、さらに言えば21世紀の今日さらに変化した状況が、昨年出版された『後殖民食物與愛情』（牛津出版社、2009）に納められたこの10数年間の短編小説によってわかる^(注18)のだが、今回は触れない。こうした自らについて前代を後代に伝える責任を負った存在としてと

らえる考え方、イメージは、詩作にも明白に表れている。ちなみに、近い将来、筆者の編訳により也斯の日本語詩集が出版される予定だが、所収作品は本人の選択および配列による。著書全体の主旨をもっとも強く伝えるものだと考えられる最後の一編は「地図を書きかえる（原語：重畫地圖）」（1994年作）である。小説「境界」でもしばしば地図が出てくるが、そのなかではガイドブック的、道案内的な意味合いが強かったのに対し、詩「地図を書きかえる」の地図は、そのものが空間的広がりと限界をしめす、いわゆる図面としての地図である。少し長いが、ここに全編を紹介してみる。改行は / で示した。この詩も原文の各行は1字目から始まるもの、途中から始まるもの様々で、飛行機の浮遊感を表していると思われるが、引用では配慮せず、一律にした。

見下ろせば金属の溶液の迸りが見える / 銀色の光の点がころがり / 銀白の光の脈を越える /
 僕たちはどこにいるのだろうか？ / 下は青色の海か / それとも空か？ / 遠くに見えるのは雪山
 の頂か / それとも誰かの脳の中の末梢神経か？ / 光の点が / 隠れ / また浮かび上がった / 君
 は今ある場所に向かっているのか？ / それともある場所から離れつつあるのか？ / 僕はある
 部屋に戻りたい / そこは古い詩集でいっぱいだ / 戦火と離散を経て / 裏表紙は破れ、塗りつ
 ぶされている / またもや古本屋で見つけ / コピーして持ち帰ったあれらの古い資料 / 音のか
 ずれたあれらのテープは / すでにないいくつかの声を記録していて / 僕の手助けをしてくれ
 る / 新しい詩の歴史を書きなおす時に / 否、そのような部屋は未だかつて存在したことはない
 のだ / 雑多なものが積み重なり / 資料を入れた段ボール箱は流浪している / 異なる海岸線
 を越え / 書籍は散逸した / 幾十年前の某詩人の漂泊する語句は / 未だ書物として結集してい
 ない / 永遠に人々が境界線を定めた地図の外を流浪している / 僕にできることはひとつの巨
 大ビルなビルを想像し / あらゆる幽霊を棲息させること / 僕は傷ついた手で / 明と暗の中原
 を撫でる / 外に散在する線のかたまりを拾いあげて / 手練り寄せ / 人々が懸命に守っている
 境界線を取り壊す / 少しの光が / 凝集し / また消滅する / 広大な青色の中で / 魚の鱗のよう
 な雲が / 一片 / 一片 / 実際の地形をさらに広々とした地図に広げる / なぜならそれぞれの点
 の上には / 僕の気にかけてる人がいるから / 境界線と旗印を越えて / 一編の好きな詩に巡り
 合う / それぞれの色の等高線の中で / 僕らは語り始める / 高山を越え / 僕らは世界のもうひ
 とつの痣を見る / 人々は一枚の継ぎ当てのために口論しても / 一本の髪の毛を納め入れる /
 自分の版図に / 魚の鱗のような雲は / 散り散りになり / 僕らの視界の外に離れて / 四散する
 心持ち / 僕らの懐かしむ人と詩は / あちらこちらにたどり着く / 僕らは心の中で絶え間なく
 すでにある地図を書きかえ / それぞれの中心と周縁を移動させ / 古い境界線を取り壊す / 自
 由に移動往来し / もともとなかった関連を作りあげる / 広漠とした中でたまさか閃く / 浮遊
 するいささかの情報 / おぼろげな光の幕の下から / だんだんと陸地の姿が立ち現れてきた /

一九九四年（注19）

冒頭からしばらくは、飛行機に乗り、山や海を越えて、地理的な越境をくりかえしながら、「光の点」を求めつつ、自らの立ち位置を探っている作者の姿が見て取れるだろう。作者は移動を繰り返しながらも、常に「ある部屋」＝原点に戻りたいと思っている。それは「古い詩集」すなわち、詩人がかつてアメリカ留学中に研究テーマとし、自らもその流れの中にあるとも言える一九三〇、四〇年代に活躍した詩人たち、戴望舒、卞之琳、穆旦ら、モダニズム詩人たちに関する詩集や研究書、資料などであると考えられるが、作者はいつか「新しい詩の歴史を書きなおしたい」と考えている。しかし大学教授としての日常業務や詩・小説などの創作活動に追われ、さらには東西の交流のために奔走して物理的な移動を余儀なくされるなかで、それらは「未だ書物として結集していない / 永遠に人々が境界線を定めた地図の外を流浪している」し、時とすると「否、そのような部屋は未だかつて存在したことはないのだ」とさえ思ってしまう。ここには、新中国成立後、これらの詩人たちが長い間、評価されない時期があったことへの思いや、自分自身の学問的核となるべき研究成果が可視的なものとなっていないことへの焦りもあるかも知れない。さらにまた、この詩が書かれた1994年頃は、香港中の人々が来るべき1997年の中国への返還に向けて、それぞれに生き方を迫られていた時期でもある。香港脱出は論外としても、香港を代表する知識人としての己の支柱の補強が必要であったろうことは想像に難くない。

ところで、中段の「数十年前の某詩人」とは、前後に散りばめられた言葉からして戴望舒(1905-50)のことを指すと思われる。戴は1920年代から上海で活躍していた詩人で、30年代前半にフランスに数年間留学。帰国後ふたたび上海で創作や翻訳を行っていたが、日中戦争勃発翌年の1938年に香港に移り、文芸を通じた抗日活動を行っていた。1942年春、当時香港を支配していた日本軍の憲兵によって捉えられ、獄につながれた。新中国成立の翌年、1950年の早過ぎる死は、その時に受けた拷問が原因だと言われている。戴が獄中で書いた「獄中題壁」「わたしは傷ついた手で」はよく知られた詩で、特に香港発信の文学のアイデンティティを確立しようとする也斯にとっては、重層的な意味でも重要な作品であろう。「わたしは傷ついた手で」は「わたしは傷ついた手で / このひろびろとした土地をまさぐる」というフレーズではじまり、かつてはそれぞれの地域の特質をもったすばらしい土地であったのに、今は侵略者により血ぬられ、荒廃している。けれども詩人は希望を失わない。「しかしあのはるかなる一角のみが昔にかわらぬすがたを保っている、 / あたたく、あかるく、力強く萌えるように活気に満ちる、 / そのうえを、わたしは傷ついた手でそっと撫でてみる、ちょうど恋人のやわらかな髪をなでるように、みどり児が乳房をまさぐるように。」^(注20)つまり西北にいた共産党政権に希望を託しているのである。

当時の状況として已むにやまれないものであったこの民族主義的なスタンスに、現代の越境者也斯は、「僕は傷ついた手で / 明と暗の中原を撫でる / 外に散在する線のかたまりを拾いあげて / 手繰り寄せ / 人々が懸命に守っている境界線を取り壊す」とうたう。どうやら民族主義的な版図

をばらばらにして、既存の地図を書きかえ、新たな陸地を見出そうとしているらしい。先ほども述べたように、この詩が書かれた1994年という現実を考えれば、詩人の内面では、中国と香港の時間的空間的な関係地図の再調整＝書き換えが必要であったのであろう。そのことは劉以鬯から引き継いだ香港現代文学の伝統にとっても、また新たな試練であったのかもしれない。97以後の詩作については、また機会を改めて考察してみたい。

おわりに

文化的なアイデンティティを中国にもちながら、香港独自の文学を探ってきた也斯は、引用した戴望舒や劉以鬯に象徴されるモダニズムを含めた中国近代文学の伝統を継承・発展させつつ、香港というアイデンティティをめぐる常に悩み続けていると言える。本論は、そうした彼の試行錯誤と苦悩の一端を、劉以鬯との比較、および也斯の詩2編を手がかりに探ってみた。詩「地図を書きかえる」を97年問題と結びつけるためには、本来ならもう少し綿密な考察がなされるべきであるが、本論の発端が劉以鬯との関係を論ずることであったので、多くは触れなかった。近年の詩作の考察とともに、新たな課題としたい。

注

- 1：1956年1月、台湾で詩のグループ「現代派」が発足した時、中心になった紀弦が掲げた六大信条の中の「われわれは、新しい詩は横の移植であって、縦の継承ではないと考える」に由来し、その後60年代の現代文学思潮の中で、＜中西文化論戦＞の一環となるなど、さまざまに扱われてきた。
- 2：2002年2月UCSB（カリフォルニア大学サンターバーバラ校）における台湾文学シンポジウムでの発言。白先勇著／周兆祥譯＜流浪の中國人－台灣小説的放逐主題＞《明報月刊》第一二一期、1976年1月などでも同様のことを述べている。なお、也斯の話では、台湾の作家王禎和は当時航空会社に勤めていて、仕事で香港を訪れるたび、台湾で見られない映画などを見ていたという。
- 3：蔡益环著《想象香港的方法 香港小説(1945-2000)論集》中国社会科学出版社、2005、176頁
- 4：林少陽「日本の『新感覚派』と香港の文学」『East Asia 東亜』2009年7月号、霞山会、107頁
- 5：劉以鬯＜劉以鬯談創作生活＞《劉以鬯研究專集》所収、四川大學出版社、1987年43頁。林少陽「言語の物質性を求めて一横光利一を通して見たある中国語小説の書記体：劉以鬯『飲んだくれ』を巡り」『言語態』第3号、言語態研究会、2002年6月に拠る。
- 6：劉以鬯＜小説會不會死亡？＞（1979年8月18日）《劉以鬯卷》三聯圖書（香港）、1991所収。林少陽「言語の物質性を求めて一横光利一を通して見たある中国語小説の書記体：劉以鬯『飲んだくれ』を巡り」『言語態』第3号、言語態研究会、2002年6月に拠る。
- 7：林少陽「言語の物質性を求めて一横光利一を通して見たある中国語小説の書記体：劉以鬯『飲んだくれ』を巡り」『言語態』第3号、言語態研究会、2002年6月、116頁
- 8：同上、117頁
- 9：同上、109頁
- 10：梁秉鈞《梁秉鈞詩選》香港作家出版社、1995、72頁
- 11：『現代詩手帖』2006年8月号、33頁

- 12: 梁秉鈞《梁秉鈞詩選》香港作家出版社, 1995, 314-319 頁
- 13: 小田実 (1930-2007) 作家。平和運動家。フルブライト留学生としてアメリカに滞在した後、ヨーロッパを貧乏旅行した体験をつづった『何でも見てやろう』(1961年、河出書房新社初版) がベストセラー、ロングセラーとなり、若者たちに大きな影響を与えた。1965年には「ベトナムに平和を！市民連合」(いわゆる「ベ平連」) を結成し、代表として活躍した。
- 14: 也斯<邊界>《記憶的城市・虚構的城市》牛津大學出版社, 1993, 2000, 207 頁
- 15: 香港在住の研究者李欧凡や也斯などは、香港の文化の特徴としてこの点をあげる。
- 16: 也斯<邊界>《記憶的城市・虚構的城市》牛津大學出版社, 1993, 2000, 220 頁
- 17: 同上, 222 頁
- 18: 筆者は本書に収められている「尋路在京都」2002について、主人公が流動の交又する“駅”の中の、ある場所にある種の安らぎを見出したことを、也斯の到達した新しい境地だと考えた。池上貞子<三個 Susie 和香港-張愛玲・Mason・施叔青>嶺南大學人文學科研究中心編《<東亞文化與中文文學>國際學術研討會論文集》, 明報出版
- 19: 梁秉鈞《梁秉鈞詩選》香港作家出版社, 1995, 323-326 頁
- 20: 本論中の戴望舒の詩の訳は、秋吉久紀夫訳編『戴望舒詩集』土曜美術社出版販売、1996による。

参考文献:

- 西野由希子「劉以鬯『對倒』と1970年代の香港文学」吉川雅之編『「読み・書き」から見た香港の転換期—1960～70年代のメディアと社会』、明石書店、2009年、79-102頁
- 西野由希子「書き換えられる“記憶”—也斯『島和大陸』考」『茨城大学人文学部紀要』41、2004年、157-165頁
- 小林さつき「1950年代における文学の環境—劉以鬯『酒徒』に見られる作家の葛藤と矛盾」『お茶の水女子大学中国学会報』25、2006年、51-66頁
- 林少陽「言語の物質性を求めて—横光利一を通して見たある中国語小説の書記体：劉以鬯『飲んだくれ』を巡り」『言語態』第3号、言語態研究会、2002年6月、101-117頁
- 林少陽「日本の『新感覚派』と香港の文学」『East Asia 東亞』2009年7月号、霞山会、100-107頁
- 金文京「香港文学瞥見」可児弘明編『香港よび香港問題の研究』、東方書店、1991年、195-22頁
- 藤井省三『20世紀の中国文学』、放送大学教育振興会、2005年
- 黄繼持・盧璋鑾・鄭樹森編《追跡香港文學》牛津大學出版社、1998
- 黄維樑著《香港文學再探》香江出版、1996
- 劉以鬯著《暢談香港文學》獲益出版、2002
- 蔡益坏著《想象香港的方法 香港小说(1945-2000)论集》中国社会科学出版社、2005
- 黄康顯著《香港文學的發展與評價》秋海棠文化企業、1996
- 香港作家聯會編《香港作家小傳》香港作家出版社、1997
- 劉以鬯編《五十年代 香港短篇小說選》天地圖書、1997
- 也斯編《六十年代 香港短篇小說選》天地圖書、1998
- 馮偉才編《七十年代 香港短篇小說選》天地圖書、1998
- 梅子編《八十年代 香港短篇小說選》天地圖書、1998
- 黎海華編《九十年代 香港短篇小說選》天地圖書、1997
- 許子東編《香港短篇小說選 1994-1995》三聯書店(香港)、2000
- 劉以鬯著《酒徒》獲益出版、2003 修訂版
- 劉以鬯著《春雨》華漢文化事業公司、1985
- 也斯《城市筆記》台北・東大圖書公司印行、1987
- 也斯《記憶的城市・虚構的城市》牛津大學出版社、1993、2000

- 也斯《後殖民食物與愛情》牛津大學出版社，2009
梁秉鈞《梁秉鈞詩選》香港作家出版社，1995
梁秉鈞《蔬菜的政治》牛津大學出版社，2006
梁秉鈞《東西》牛津大學出版社，2000
施蛰存·應國靖《戴望舒》三聯書店（香港），1987